

## 「臨床に求められる知」に関する一考察

— エーリッヒ・フロム思想と知識創造理論を通して —

本 多 祐 子 (愛知教育大学研究連携課)

廣 瀬 幸 市 (愛知教育大学大学院教育学研究科)

### A Study on “the Knowledge of Clinical Needs”

— With Reference to Erich Fromm’s thoughts and Knowledge Creation Theory —

Yuko HONDA (Research Affairs Division, Aichi University of Education)

Koichi HIROSE (Graduate School of Education, Aichi University of Education)

**要約** 本稿は実存面と職業面が交叉する「臨床」に求められる知を追究し得る概念提供を図る仮説生成研究である。臨床に求められる知について、その思想をErich Fromm (以下、フロム) に求めつつ、知識創造理論を通して考察可能な一概念を提供する。本稿では臨床職の「ケア」に関するアポリアを述べつつ知の在り様から生起し得るケアの性質を例示し、臨床には人間の社会的・経済的構造と人間存在の生の全体性の中で省察され続ける個と組織の知が求められていることを明らかにした。

**Keywords** : 臨床, ケア, エーリッヒ・フロム

#### I 問題と目的

臨床職の専門性や倫理などに関する課題の複眼的追究を試みる論者らは、知見の統一よりも、その探求過程を重視する。みえ難い専門性・専門職性に関する研究、専門性自体の目的を問う研究、他者や社会との間での倫理に関する研究等の多くの蓄積はあるが、これらの複眼的思考を促す研究、臨床の知が臨床職の存在と他者・社会構造の中で創造し続けられることを志向する研究は少ない。したがって本稿はここに着目した概念提供を目的に、フロム思想と知識創造理論(Nonaka & Takeuchi, 1996)を手がかりに仮説生成を試み、臨床職のアポリアである「ケア」を「純粹贈与」と捉える知見(矢野, 2013)に依拠し、求められる知の追究可能性を探る(本稿中の「臨床職」は、領域を超えて臨床に関わる実践者・研究者らを想定した)。

#### II 本研究の立場

本稿は学際性を重視する立場に立脚し、「臨床」の職業面と実存面、認識論・存在論・経験論が関わり合う知の検討可能性を探る。即ち「臨床の知」追求の流れの中、教育社会学を基に専門家の知を問い直そうとした「臨床教育学」(新堀, 2001)、近代の諸科学に対する「生きた具体の姿」に寄り添い人間生成と援助の諸相の解説を図る「臨床教育人間学」(高橋, 2004)、社会構造論・臨床哲学などに依拠しながら自己創出を支援する教育の倫理的基底を追究する「教育臨床学」(田中, 2012)、多次元的・重層的存在である人間存在の多様な次元の開放を追究する「ホリスティック臨床教育学」(中川, 2005)などに立脚する。

また本稿では「臨床」を他者が生きることに関わる場・関係・活動・あり方といった意味で用いたが、紙幅の制約上、語源や「臨床の知」が問われた背景等は割愛し、本稿が依拠した論の一部に触れておく。田中(2004)は臨床を「かけがえのない個体存在としての私のかけがえのない個体存在としての他者への応答」とし、角野(2010)は「身体的・精神的病に陥っている人間存在に臨む実践」として「臨床の知」における人間を考え知ること自体のパラドックス性を指摘する。また矢野(2010)も、パトスを知る暴力性や痛みや一切の対象化を不可能にする無条件の歓待の喜びの重要性を指摘する。一方、出口(2002)は、抑圧された対象の多様性・重層性や自他の共属性を認識し、受苦=受動感情を能動感情へ切り替えるスピノザ=フロム的な理性に着目し、理性的認識そのものが身体的感情に治療的効果を齎すような知の形態を「臨床の知」とした。そして鷲田(1999)は、実存面と職業面の交叉するところが臨床であろうとし、かけがえのない「だれか」として「わたし」になるケアの実存的な面と、職業的な距離感と関係の問題は決着がつかないとする。

#### III 臨床におけるフロム思想追究の可能性

本稿では臨床における自他や社会へのかかわり方に関する知の追究可能性を探るため、社会における人間の存在様式を考察したフロム思想とその研究に立脚する。フロムは人間実存に基づく精神病理の解釈や時代精神に関する見解を問い続け、Freudの精神分析を継承しつつ機械論的唯物論を批判し、Marxの社会・経済的条件を取り入れつつMarxの人間観の欠陥を指摘

し、人道主義倫理に基づく精神分析論を展開した。出口(2002)によるとフロムはSpinozaの理性概念を基に社会心理学・倫理学を構想し、「臨床の知」としての理性の要求〈理性的認識がその認識力をもって治療的効果を齎すような理性の要求〉を回復した。即ち「ある」という私の存在力を充足する、自己を統制する超越的目的・包摂価値の放棄により、自己=他者の共属性、「ある」という実在性の経験がされるとし、臨床の知は実用実践の観点—操作可能性—からは正反対の相対作用する知であるとする。

なおフロムは、フロイト左派・人間主義者・実存主義者とされ、実存的接近における曖昧さなどの批判もある。しかしフロムは「個人が独立した自我として存在しながら、しかも孤独ではなく世界や他人や自然と結び合っているような積極的な自由」を論じたり(Frohm, 1941)、労働者や被雇用者が研究され操作され人間関係すら労働者が物体化され疎外された関係として扱われてきたことを批判したり(Frohm, 1963)したことは、職業と実存の交叉部分にある臨床の課題を考察する上で示唆を導き得る。またフロムは、人間の発達に必要な超越(自我, 貪欲, 利己主義, 同胞からの隔絶, 結果としての心底からの孤独などの狭い監獄を超越する能力)が、心を開いて世界に関わりをもち同一性と全体性を体験するための条件、生きている全てのものを楽しみ自分の能力をまわりの世界に注ぎ込み〈関心を持つ〉能力の条件と捉えた(Frohm, 1969)ことは、実存主義者の主張を裏付ける重要な視点と思われる。

#### IV 「ケア/ケアリング」議論の概要

幅広い視点からの膨大な蓄積がある「ケア/ケアリング」研究の全てを展望することに限界がある中で、ここでは代表的と思われる議論の概要のみを述べるにとどめておく。ケアに関する哲学的考察はMayyaeroff(1971)の『*On Caring*』とその原型(1965年 *The Inter National Philosophical Quarterly* 誌上での発表)に始まった(伊藤, 2006)。Deweyやフロムらの影響を受けた彼の概念は極めて実存的で「一人の人格をケアするとはもっとも深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けること」「相互信頼と深まり質的に変わっていく関係を通して成長する過程」とされた。教育領域ではNoddingsが『*ケアリング (Caring)*』において、ケアする者とされる者が自身の生の意味を生きていることとした(立山ら, 1997)。彼女はMayyaeroffがケアする人を重視する点を批判しつつ、他者を自己の延長とする前向きな関係として積極的に評価した(伊藤, 2006)。看護領域ではBennerやRoachなどの論が代表的である。BennerはHeideggerらの思想を基にケアリングに存在するパワーの本質を特定し、ケアリングを通じた結びつきと関心から実践が可能となることなどからケア

の第一義性を浮き彫りにした。一方Roachは、ケアリングは人間の存在様式で、ケアすることにより人は本来の姿・真の人間・自分自身になるとし、ケアリングが個々の職能や役割や職務へと限定して理解される傾向を批判した。池川(1991)の看護の本質としての哲学的考察もよく知られる。池川は、近代技術文明に伴い自然が人間の生産や消費生活のために破壊されようとし、人間が生態系の中で自然治療力に対する基本的信頼を喪失していることなども指摘し、自分自身の成長を目的にはできない人間が人間に向かっていくケアを職業とする者の倫理観も考察した。他の代表的なケア論にGilliganの女性の経験からの考察、Kuhseのケアが女性的な倫理とされてきたことへの批判、Watsonの道徳的理念としてのトランスパーソナルなケアリングを基盤とした看護論などがある。

日本看護協会(2007)はケアリングを看護の特性を表す中心的価値・概念とし、看護の独自性を「療養上の世話」「生活の支援」としてのケアに見出そうとしてきた歴史も長く、キュアに対し看護の特徴を際立たせる意味で用いられる場合もあるとする。一方、学校教育でケアは従来、養護教諭やカウンセラーによる身体的・精神的ケアや障害児教育における医療的ケアに限定的に用いられていた(住野・中山, 2010)が、徐々に教師と子どもの相互補完的な関係構築にケアが認識されてきた。また社会学者の三井(2004)は、他者の「生」を支えることを志向する働きかけをケアとし、その人のそれまでの生の在り方、生への意味づけ、周囲の人々との関わりなど、その人その時の生の固有性の重要性を指摘した。

さらに科学哲学を基にスピリチュアルから社会保障の次元まで広く追究する広井(1997)は、ケアが経済社会の展開で次々に外部化され、家族内から経済の領域へのケアのシフトが家族の変容を意味していることなどを述べ、消費社会における「ケア産業」の発展と家族の意味を問い直す必要性などを論じた。一方、川本(2005)は社会倫理学の立場からケアと社会のつながりをめぐる問題複合を目指し、「ケアの倫理」と「正義の倫理」の統合やケアを分かち合う制度の探究を図る。臨床哲学の立場から堀江・中岡(2005)は、ケアをその人の内部や表面、周囲に生じる個々の事態へのかかわり、その継続により人がかかわることとし、生活様式や社会の仕組みの変動に伴いつつ倫理的とされた「型」が通用しなくなる倫理自体の危機なども指摘した。

そして中野ら(2006)は、ケアには本質的に個人的・主観的・特殊的で一般化しきれない、一般化されると本来のケアでなくなる側面も含まれる可能性、倫理が原理や法則の追究を目的とした学問的方法では捉えきれないことなどを前提に、学問的境界を越えるべく編著を発刊した。また吉原・広岡(2011)は、ケアする者とされる者との関係に織り込まれている生きる営みの

再検討を目指し編著を発刊した。吉原らは、社会や個人の問題をホリスティックに捉え修復することを手助けする思想・理論・運動を高めることが喫緊の課題とした。また守屋・吉田(2009)はケアシステムの中で個人化時代を踏み越える新たなつながりのあり方が問われていることに着目し、関係・全体性・聖性の次元から、人間や世界・物事を全体的に認識し判断し行為していこうとする、人間が自らの認識や行為の限界を自覚しつつ、より全体的なつながりの中で生きていくための接近を試みた。以上の議論を踏まえた「ケア/ケアリング」の定義づけは困難であるが、本稿では「他者がよりよい存在である自他の関係性を示そうとする人間の存在様式」であることを捉えておく。

## V. 臨床職に求められるケアと職務との関連性

### 1. ケアの職業化と感情労働

ケアと職業との間で議論が重ねられた「感情労働」は、Hochschild(1983)が示した職務上適切・不適切な感情が規定・管理され、働き手が適切な感情状態を保ちつつクライアントに特定の感情を引き出すことが要請される労働(武井, 2005)を表し、感情が商品価値をもち、その適切さが意識的・無意識的に規定される基準(感情規則)により労働者としての能力が評価される。Chambliss(2002)は道徳・倫理面で乗り越えるべき課題などを指摘し、吉原(2011)は、感情操作が仕事の質や報酬と結びつけて考えられ局限化した場合に「自己」の侵蝕になる恐れ、近年のケア概念の注目「自己」の変貌がかかわる可能性、近代が生み出した自他関係や人間存在と人間関係の在り方を問う必要性などを指摘した。一方、広井(1997)は、従来のサービスの延長線や経済の枠組みでは捉えきれない「対人社会サービス/ケア産業」が産業社会そのもののあり方を変容させていく影響力を有することなどを指摘した。矢野(2013)は、ケアが貨幣の領域に拡張し人格に深く関わるものまでサービスとして取り込まれていく危険性に曝かされた結果、譲渡不可能なあり方をも「感情労働」をもとに貨幣との交換で他者に差し出すよう要請されるとした。また職業倫理として贈与交換・市場交換が重要な意味をもつが、職業倫理として求められる次元で働く純粋贈与を付随的と捉えるべきではないとした。

これらの議論は、ケアの市場化、専門職化とその使命、労働上の業務・職務、職業集団や職種間、雇用者からの評価などの狭間で、集団の中での個のケアの限界や自己像との葛藤などを伴ってきた。ゆえに臨床職が職務に限定し得ない人間として、関係性のあり方の理想をケア議論に求めたと捉え得る。このような部分は見え難く、他者や社会に伝達可能にするにも倫理的判断をなすにも必要不可欠な議論であった。またケアの市場化の中、私益を優先し得ないと認識する臨床職らが倫理的な意思決定をなすには、基づく倫理自体の

議論も必要であった。さらに臨床職が自然発生的な共同体とは異なる形で出会う他者に臨み、他者がより望ましい存在であることを目指すため、倫理綱領等で明文化しきれない感情規則が求められた。鷺田(1999)は、ケアは職務を超えて一人間として現れることなしに職務を遂行できないという矛盾を抱え込んだ営みで、割り切れないものを割り切れないままに受容しながら、何らかの解決に至ろうとする際の困難に中間性・両義性に立とうとする臨床哲学の立場を述べる。今後もケアの市場化の進展が予測される現代、この両義性への向き合い方が問われているといえよう。

### 2. 臨床職の業務とケアの関係

臨床職の業務とケアの秤量に関して、三井(2004)は看護婦によってなされている「戦略的限定化」を指摘した。三井はこれを、自らのなすべきことやできること、相手との関係性などに、自らの前提が通用しない時、その状況に即して限定してなすべきことは最大限に試みることにとする。そして三井は、看護職が主体的に自らの職務を問い直し、限定化する基準を決断することでなされる戦略的限定化は、自らのなしうることの限界を認め不確実性を意識することが、他の看護職や他職種との協働を呼び込むことにつながることを述べ、それが、自明視していた観点が意識され問い直す契機となるともし、これを乗り越えるには、「業務的」態度(患者をモノのように扱い責任を組織上課せられる業務に限定する試み)や、「看護婦・職務として患者に関わると意識し、それ以上は必要がないとみなすといった過程」を経るとした。また大山(2010)は、心理臨床における「限界設定」の本質的意義を、絶対的な区切りや制限を通してこそ人は超越的な位相と関わりをもつことができる点にあるとした上で、重要な発話行為が本来の力をもつには、心理療法を成立させる枠を設定する発話行為、限界設定を行う行為遂行的発言が一貫し、セラピストとクライアントの関係性を越えた次元がある実感が熟している必要があるとした。また大山は、枠は不可知のものとの関わりをもつために本質的に重要で、人類が世界や命の操作に対する能動性を拡大していても必ず限界の地平が付きまとうこと、臨床の知は必然的な限界に直面しつつそれに向き合い、希望と意志に支えられていくための知であろうとした。ここで大山が述べる次元で限界に向き合う意志から「ケア」が生起されると捉えてみたい。一方、伊藤(2006)は、ケアの社会化に伴い創出された新たなニーズに応えるケアにおける、応えられない個別のニーズや全人格的な応答の難しさ、ケアリングをその人全体への応答・関係性とする際の新たな見方の可能性を指摘した。即ちケア議論が専門職への国家的関与(資格や免許状制度・養成機関等に関する施策等)、社会的ケアの十分な提供に関する施策の低減にもつながることを指摘し、二分法(専門職/非専門

職, 有給/無給など) を超え「人間の存在様式」として互いの関係の形成を通じたケアリングのネットワークで成り立つ社会の可能性を考察した。

したがって臨床職のケアは, 職務上出会う他者との関係性及び社会との関係性において不可欠であるが, 三井や大山の知見からは, 臨床職自らがなし得るケアの限界を認めつつ, 「枠」においては唯一無二の自己が最大限他者と向き合うことが求められていると捉えられよう。ここで「枠」を他者に専心する時間と捉えてみたい。鷺田(1999)は, 相手に〈時間をあげる〉こと, 時間を共に過ごすこと自体が一つのケアとするが, 「専門職/非専門職」「有給/無給」いずれで出会う関係であれ他者がよりよい存在として生きることへ貢献できた時間が, 事後的に「ケアリングの関係にあられた」と捉え得るといえよう。

### 3. 臨床職が「与える」ことの意味と課題

ケアを「時間を与える」純粹贈与とした矢野(2013)は, ケアに関わる職業に捉えられてきた互酬的な側面を批判し, 「教育・介護・看護・医療それ自体はケアではないが, ケアのない教育・介護・看護・医療は十分な意味での教育でも介護でも看護でも教育でもない」とした。またケアにおける専心を, 我を忘れて身を投ずる自己の放棄をも意味し, 他者への純粹な贈与が無条件の受容となるとした上で, ケアに関わる職業がケアを「贈与交換」に切り替えることで, 他者に対する全人格的な関与の責任を職業役割に関わる限定的な範囲内での責任に変えることもできたことを指摘した。そして矢野は「純粹贈与」に触れるとき生命全体への無条件の倫理の可能性が開かれるとし, 有限な存在者たる人間が「誰か」を気かけ「時間を与える」ことで, 受贈した者が「誰か」に「時間を与える」ケアを贈与する「贈与のリレー」を説明する。即ち生ける贈物としての犠牲の対価は存在せず返済不能となり不均衡を増殖させ, 新たな贈与を生むとする。さらに矢野は, かつての共同体や世代を超えた相互扶助の関係や, 共同体内で自ずと成立していた倫理に対し, 施設で偶然に出会う, 贈与交換の関係を継続する可能性のない者同士が機能に限定され関わり合うことから, 職業としてケアに関わる人は共約可能性において労働時間と賃金が等価交換されており, ケアは人格の宿る身体として固有性をもったこの人が生きている「時間を与える」ことと捉えた。そして矢野は, 教育・介護などそのものは仕事として報酬の対象で「時間を与える」ケアは報酬の対象にあってはならず, 専心する時, 賃金労働から脱した良き隣人として「時間を与える」真にケアする人となることなどを指摘した。

したがって臨床職自身が生きている時間は, 外部化されたケアを担うケアの「贈与のリレー」の可能性にある存在として捉え得る。職業・職場の使命を果たすべく職務を通して他者に臨む臨床職は, 一市民として

ケアの循環可能性の中に存在するのであるから, ケアが人間存在である限り臨床職の存在が社会にケアを与え得る。臨床職の自己の存在による純粹贈与によってケアの循環を促すことが社会における臨床職の倫理であろう。しかしケアの職業化が進展し続ける現代, 三井(2004)がケアの背景に自己陶醉や自己満足・利己心・金銭的報酬などがあったとしても問題としないように, 臨床職によるケアの贈与交換の側面を認めつつも, 臨床職自身による「与える」ケアが生起される知の在り様が検討される必要がある。ここでケアを「与える」意味がフロム(1956)の愛に関する論考から考察可能と思われる。フロムは, 愛は能動的な活動で「自分の生命(喜び, 興味, 理解, 知識など自分に息づいているもののあらゆる表現)を与えることにより他人の生命感を高める」「与えることは他人をも与える者にする」とした。そして愛の能動的性質に互いに依存しあっている「配慮」「責任」「尊敬」「知」をあげ, 「積極的な配慮(care)のないところに愛はない」「愛とは愛する者の生命と成長を積極的に気にかけること」「愛の本質は, 何かのために働くこと, 何かを育てること」などとした。即ちこの能動的性質がケアの純粹贈与を生起すると捉え得るが, フロムが愛を論じた背景の思想から, ケアの贈与交換との側面を認めつつ「与える」ケアの生起につながる知の検討可能性を探りたい。

### VI. フロム思想の概要

ここでは本稿に関連する部分に限定して, フロム思想と論者らの見解を概観しておく。フロムは, Freudの力動的な概念に従いつつ, 社会構造・経済・権力などが個人に及ぼす影響に着目し, 性格の基本的地盤を世界に対する人間の特殊な関係の仕方に向け, FreudとMarxの思想に共通する精神状態を「疎外」概念で捉え「社会的性格」を論じた。これは, 集団の大部分の成員がもっている性格構造の本質的な中核で, その集団に共同の基本的経験と生活様式の結果発達したもので(Fromm, 1941), この次元におこる主観的現象を「疎外」とした(Fromm, 1958)。即ちフロムはMarxの「疎外」の, 経済条件と相互作用にある人間内部の非合理的な権力欲, 破壊欲の認識の不十分さを指摘し, 「疎外」を, 社会的に形作られた欠陥の一つである軽度の自己疎隔の形態を意味し, 旧約聖書の予言者らの偶像崇拜に等しいとした。また「人間が自分自身を自分の力や豊かさの活動的な担い手として経験するのではなく, その生き生きした本質を投射した, 彼の外部の力に依存する貧しい物体だと自分を感じずる」疎外の過程が, 人間の仕事, 消費するもの, 国家, 仲間, および彼自身の関係にまで及ぶとした(Fromm, 1958)。またフロム(1992)は, Freudが転移現象を発見した時に発見していたのが, 人間のもつ偶像崇拜(疎外)への渴望であったとした。即ち人間

が、実存の曖昧さのある人物や制度や理念を絶対的とし偶像へ変容することで生の不確かさへの対処法を見出そうとしたこと、偶像への服従による確実性が得られた錯覚を創造したことを指摘した。そして精神分析における情動経験からの疎外に伴う「知性化」を危険とし、自己への気づき、自覚を最大限のものとする事で人間が自らを開放すること、よき生と自立を成就すること、愛する能力、批判的で脱錯覚的な思考を「ある」ことに求めた。フロムの「疎外」に対する見解は諸著作のいたるところに認められ、晩年の著作では「あること being」をやめ「持つこと having」を増やすほどに疎外されていくことなどを指摘した。なお「持つこと」は財産や地位を所有することにこだわる生き方、「あること」が自分の能力を能動的に発揮し、実践のプロセスに生きがいを感じることができる生き方を意味する人間の存在様式で、高度に産業化の進んだ社会では「持つこと」が当然視され「あること」を圧倒してきたとした。「あること」は、何も持つことなく持とうと渴望することもなく喜びにあふれ、自分の能力を生産的に使用し世界と一になる存在様式 (Fromm, 1976) で、自分の人間的な力を生産的に使用する「内面的能動性 inner activity」によって、与えられた豊富な人間の天賦を表現し、成長すること、愛すること、関心を持つこと、与えることなどを意味する (Fromm, 1976)。疎外されない能動性 (= 生産的能動性) によって私は、私と能動性と能動性の結果 (生産物) が一体である意味を含む能動性の主体としての私自身を経験し、「持つこと」によっては自分の価値を〈使用価値〉としてではなく〈交換価値〉のある商品として経験するとして、疎外された「市場的性格」を指摘した (Fromm, 1976)。

そして萩森 (2010) は、フロムの “activity” に着目し、自己の存在の固有性への気づきは自己の存在の相対性への気づきを意味し、世の中から独自性として発揮することが期待されている力を遺憾なく発揮すること、その結果、自分と世界との関係性の理解が更新され、新たな世の中の捉え方、方向付けの枠組みに沿って自らに内在する力を発揮していく連続した営みを考察した。またフロムは、他者の自己実現を図る限りで自己実現する活動の様態 (= 生産性) により自分の発達を自己実現過程へと転換すること、これを通して潜勢的諸力を十全に身につけた自立的個人となり、その限りで行為対象である世界と緊密に内的に結合するに至ることなども論じた (田中, 1980)。即ち人間は、能動的に自身の能力を発揮しているとき自分自身であるし、自分自身は持っているものや外部から与えられた属性で確かめられるのではない。

またフロム (1976) は、持つ様式もある様式も共に人間性における可能性で、生存を求める私たちの生物学的衝動にある持つ様式を促進する傾向と、人間に深く

根差した自分の能力を表現し能動性を持ち他人と結びつき利己心の独房から逃れ出たいという欲求の、いずれが優位になるかは社会構造、即ち社会の価値と規範が持つ様式を育成する文化と、人間の可能性に根差した、あることと分かち合うことを育成する文化が決定し得るとした。このようにフロム思想は二分法の両極への影響を及ぼす文脈と共にその力学をみると、諸課題を考察する上で示唆に富む。先の萩森も、内面的能動性・外面的能動性との双方の獲得・発揮がアクティブ・シティズンシップの実現につながり得ることなどを考察した。また関根 (2009) は、フロムの二項対立式図式は議論を整理し批判すべき難点を浮き彫りにする点で優れている反面、過度の単純化を招き得る弱点も合わせ持ち批判もされてきたとしつつ、二極をつなぐダイナミズムを想定しながら注視すると相互の関係可能性が見え、その論理は静的な二元論的思考におさまりにきれない余地を十分に想定させるとする。

さらにフロム思想はより広い視野を導く。持続可能な社会の構築を目指した教育の可能性を述べる今村 (2005) は、フロムの二分法のベクトルの和として示される人間の社会的生活は、社会経済的構造と基本的生活体験に影響を受ける人間存在の生の全体性 - 生活・社会・経済・文化・経験 - の在り方を左右する上で必須とする。そして人間の消費スタイルや付随して獲得される「二次的な自己意識」感、行動、性格構造などが「ある存在様式」を基盤としたものへ変化しない限り人類の持続はないとし、「あること」の体験を通じた新たな倫理観・社会観・人間観、自然・社会環境に対する理性的態度がとれる人間教育の可能性を論じた (今村, 2005)。また人間が生態系・地球環境を破壊し生命・人類の存続の危機への対応を突き付けられている現代、鈴木 (1999) はフロム思想に触れ、生活している場との共生を考えながら次世代を担う児童生徒の健康教育の可能性、人間社会を包括した地域教育力を有する教員養成の必要性を述べた (鈴木, 2014)。なおフロム (1956) は、人間が動物界すなわち本能的な適応の世界から抜け出し自然を超越したことにより理性を授けられ、どの時代・社会においてもいかに孤立を克服するかの課題に迫られるとし、一時的な祝祭から得られる一体感、偽りの一体感に過ぎない集団への同調とは異なる人間同士の融合として「愛」が人類に不可欠とした。フロム思想は、生態系の中での自己の生命存在の固有性に気づきを得る視点を導き、人間ゆえに与えられた課題に向き合う次世代を担う児童生徒の教育から、人間ゆえの生に向き合う臨床職の在り方で複眼的に考察し得る示唆に富む。

以上、フロム思想からの諸課題の探究可能性をみた。感情労働では、疎外されない自己ゆえに「あること」か「持つこと」で葛藤が起きるのであるし、臨床職が相対的に認識する自己の存在の固有性と期待され

ている独自の力を遺憾なく発揮することができれば、個として主体を賭けるケアが生起されよう。なお、ここで相対的な視点が不十分ならば自己目的的他者への関与にすぎず、無意図的な権力すら働きかねない。しかし臨床職者は、職業・職場を介したケアを通して、疎外されない自己の可能性に気づいたとき、ケアの循環を促す必然性に気づかされ、フロム思想によってその存在様式が人類の存続にまでつながり得る課題として認識される。

## VII. 臨床に求められる知の在り様とケア

本稿では、紙幅の制約上、専門職論は割愛するが、“profession”か否かに拘らず、臨床には、身体も知も心も備わる人間存在がケアされる者にも職業・職場にも社会からも「求められる (needs)」。そして矢野(2013)が、ケアは教育・看護など自体ではないが、ケアのない教育・看護などは十分な意味でのそれらではないとしたことを受け、臨床職の職性として不可欠な「知」の次元での追究可能性を試みる。ここでフロム(1977)が「あること」は言葉では記述不可能で経験を分かち合うことによるのみ伝達可能としたことから、「暗黙知」として検討可能と捉え、知識創造理論におけるSECIモデル(Nonaka & Takeuchi, 1996)との融合を試みる。

### 1. 知識創造理論における「知」の概念

暗黙知は個人的経験、組織文化などに存在する身体的・非言語的な知で、SECIモデルではその対概念に「形式知」がおかれ(表1)、両者の相互作用により個人の知識が人々に共有され活用される過程が説明される。知識創造理論の源流には暗黙知・形式知・実践知の総合プロセスに認識論・存在論・経験論が関わり合っており(野中, 2013)、これを具現化するSECIモデルでは、S[共同化] (暗黙知⇒暗黙知) ⇒ E[表出化] (暗黙知⇒形式知) ⇒ C[連結化] (形式知⇒形式知) ⇒ I[内面化] (形式知⇒暗黙知) の過程が個人⇒集団⇒組織(社会)レベルへとスパイラル状に継続する(図1)。

暗黙知	形式知
主観的な知 (個人知)	客観的な知 (組織知)
経験知 (身体)	理性知 (精神)
同時的な知 (今ここにある知)	順序的な知 (過去の知)
アナログ的な知 (実務)	デジタル的な知 (理論)

表1 暗黙知と形式知の対比(Nonaka & Takeuchi, 1996)

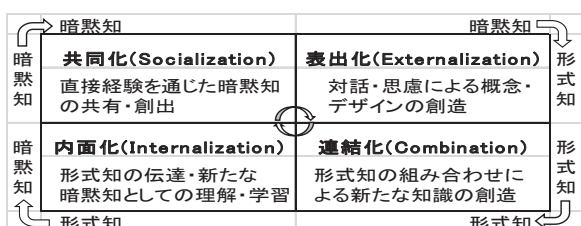


図1 SECIモデル(Nonaka & Takeuchi, 1996)

このモデルでは、暗黙知と形式知の変換プロセスを通じて新たに創造された知識が組織レベルで共有される点が強調された。なお組織文化研究では、価値・意味・コミットメントなど知識の暗黙知的側面や、共有された意味体系としての組織の学習能力、メンバー間や環境との相互作用などが研究されてきた。ここに野中は、人間の創造性、組織の環境に対する能動的な働きかけ(環境創造)などの視点の必要性を指摘し、幅広い哲学を背景に知識創造理論を展開した。野中(2013)によると、SECIモデルにおける共同化は「共感」により主客未分状態における直観を重視する現象学(Husserl等)、表出化が「対話」により言語等を媒介とした概念化を重視するギリシャ哲学(Socrates等)、連結化が「推論」により抽象的概念の具体的形態への落とし込みを重視する伝統的な科学的手法(Descartes等)、内面化が「実践」と同時に「内省」による学びを重視するプラグマティズム(Dewey等)に基づいている。さらに野中は、暗黙知と形式知の相互交換を媒介、促進する「実践知(フロネシス)」を、Aristotelesの概念を援用し「共通善の価値基準を持って、個別にその文脈のただ中で最善の判断ができる身体性を伴う実践知」とする。この概念は、「省察」から新しい知識を構築する人間存在を重視する意味で実存主義により深く関連づけられている。

### 2. 臨床に求められる「省察」

「省察」は看護や教育などで重視され、文部科学省(2014)も「学び続ける教員像」の前提に、省察する中で相互に関連し合いながら形成される必要性を示し、荒木(2015)の「教育のダイナミズム、複雑さ、関係性を見極めていく教師の在り方」かつ「なぜ自分はここに存在するのか」という問いを持ち続ける「変化し成長する教師の在り方」という二重の意味での「在り方」が同時に求められることの指摘などもある。心理職においても、例えば牧(2014)が、専門行為としての臨床心理行為は訓練により身に付けた客観的な知識や技能を適用することを意味するのではないと「省察」や「実践知」の重要性を述べた。

ここで本稿が依拠したSchon(1983)の「省察」を概観する。「省察」は、機能不全を起こした暗黙的实践知の更新による困難や問題を乗り越えていく実践的能力を意味し、Schonは日常活動の遂行あるいは活動を行う対象の中に埋め込まれた無意識の知と捉え、Polanyiの「暗黙知」を引きつつ「行為の中の知 knowing in action」概念で説明した。そして「行為の中の省察 reflection in action」「実践の中の省察 reflecting-in-practice」「状況との対話 conversation with situation」などにより、実践の構造や課題を捉える枠組みの発見とそれを組み換えていく機会とする螺旋的な発展の過程を捉えた。また専門的知識や科学

的技術を合理的に適用する「技術的熟達者」に対する「反省的实践家」像を示した。優れた反省的实践家はすでに身につけた知識や理解に囚われずたえず反省を繰り返し、新しい見方や方法を創造的に生み出していくことのできる人物とされる。このような「省察」が自他や社会とのつながりの中での人間存在の志向性や存在様式を含めてなされ、臨床に求められる知の創造へとつながりゆくためには「ダブル・ループ学習」が求められよう。これは、普段意識せず共有している前提、物の見方や捉え方、行動のパターンなど、拠り所となっている枠組みそのものの適切性を吟味し、修正したり新たな枠組みを構成したりする、SchonがArgyrisと共に示した組織学習の理論(Argyris & Schon, 1978)である。以上より、臨床には、専門職化、ケアの市場化の中での知の在り様への問いを含めた、個と組織の省察によるダブル・ループ学習が求められていると捉え、これを可能ならしめる概念として以下に可視化を図る。

### 3. 知の在り様の可視化の試み

ここで知識創造理論に基づきつつ、フロムの二分法の相互の関係可能性をみながら人間の社会経済的構造と人間存在の生の全体性の中での知が追求され得る概念の可視化を図2で試みた。図2では知の性質と生起し得るケアを検討可能にするため、各象限の性質を象徴可能なキーワードで示すと共に生起され得るケアの特性を加えた。また活動過程における知と省察それ自体を専門性とする「反省的实践家」を、各象限を往来しつつ省察する臨床職の存在として中心に置き、臨床職が知の在り様を自他と社会とのつながりの中で問い続けながらケアに携われる可能性を図った。また図2では「疎外されない自己」の「生産的能動性」によりケアの純粹贈与が生起されることを示したが、自己の存在の固有性を相対的な視点で洞察し、発揮することが期待されていると認識する独自の力を遺憾なく発揮することが、個として主体を賭けるケアとなろう。なお、相対的な視点での十分な自己洞察がなければ自己目的的な他者への関与にすぎず他者への無意図的な権力すら働きかねない。しかし職業・職場組織を介したケアを通して疎外されない自己の自己実現可能性に気づいたとき、臨床職者はケアの循環を促す必然性に気

づかされ、フロム思想により人間形成ひいては人類の存続にまでつながり得る課題として認識される。そしてケアされる者にはIの事象が求められようが、それが共有されるにはSECIモデルに基づけばIIの事象が欠かせない。そこから生起されたケアが臨床職内外で贈与された場合、その体験が暗黙知となり他者への贈与へとつながり得る。またケアの市場化の中でIIIの事象の知が発現されることは否めないが、臨床職は専門性と自己を織り交ぜながら人間として発達していく。したがって、臨床職自らがかつて「誰か」から与えられたはずであるケアを「与えたい」とする欲求が喚起される組織文化が求められよう。さらに「あること」が子ども時代からの暗黙知となり、その子どもが将来臨床に臨むならば、彼は純粹贈与としてケアの循環を促し得る存在となるだろうし、これを目指す学校文化も求められよう。

以上、人から生起されるケアの在り様は、共存する人々の存在により変わるが、臨床には〈あること—もつこと〉〈暗黙知—形式知〉が省察され続ける個と組織の知が求められているといえよう。また「疎外されない」個々の「あること」が共有される組織の知がさらに個の実践知として省察され続けていくことが、ケアの循環につながり得るといえよう。

### VIII. 結論および今後の課題

ケア議論のアポリアを取り上げつつ、臨床に求められる知をフロム思想と知識創造理論に基づき考察した結論は次のとおりである。

①ケアが市場化に伴い互酬性を帯びる現実の中、臨床職が社会の中でケアの循環を促す存在である必要がある。②臨床職が相対的な視点での「疎外されない」自己の存在の固有性を認識することにより①を可能ならしめる。③知の在り様は、共存する人々によって変わる。臨床には、個と組織の省察によって、社会経済構造における人間存在の生の全体性の中で創造し続けられる知が求められている。

本稿は、臨床におけるフロム思想追究の可能性を示したにすぎず、ケア論者らが依拠したフロム以外の思想に触れることも、「存在」や「疎外」に関するフロムの他の論に触れることもできていない。またフロム思想の解釈も十分とはいえず、紙幅の制約上「実践知」「省察」などの他の論も述べられていない。今後の課題としてこれらを追究するとともに、本稿をより精緻化しつつナラティブ等によっても追究したい。

(本稿の一部は平成26年度科学研究費(課題番号26885073)の助成によるものである。)

### 【引用・参考文献】

荒木寿友, 2015, 教員養成におけるリフレクション—自身の「在り方」をも探求できる教師の育成に向けて—, 立命館教職教育研究2号。

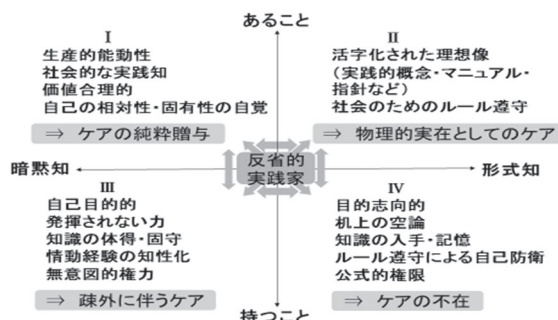


図2 知の在り様とケア (仮説)

- Argyris,C.&Schon,D.A., 1978, *Orgazational Learning: A theory of action perspective*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Chambliss,D.F., 1996, *Beyond Caring hospitals, nurses, and the social organization of ethics*, The University of Chicago, 浅野祐子訳, 2002, ケアの向こう側—看護職が直面する道徳的・倫理的矛盾, 日本看護協会出版会.
- 出口剛司, 2002, エーリッヒ・フロム—希望なき時代の希望, 新曜社.
- Fromm,E., 1941, *ESCAPE FROM FREEDOM*, Franz J. Horch SSOCIATES Agency through Tuttle-Mori Agency Inc., 日高六郎訳, 1951, 自由からの逃走, 東京創元社.
- Fromm,E., 1956, *The Art of Loving* Harper & Brothers Publishers, New York, 鈴木晶訳, 1991, 愛するということ, 紀伊國屋書店.
- Fromm,E., 1963, *DOGMA OF CHRIST* Holt Rinehart and Winston Inc. 谷口隆之助訳, 1965, 革命的人間, 東京創元社.
- Fromm,E., 1968, *Revolution of Hope: Toward a Humanized Technology*, Harper&Row, Publisher, Incorporated through Jon Weatherhill, Inc. 作田啓一・佐野哲郎訳, 1969, 希望の革命, 紀伊國屋書店.
- Fromm,E., 1976, *TO HAVE OR TO BE?* Harper & Row, Publishers, Inc., 佐野哲郎訳, 1977, 生きるということ, 紀伊國屋書店.
- Fromm,E., 1992, *The Art of Being*, 小此木啓吾監訳, 2000, よりよく生きるということ, 第三文明社.
- 広井良典, 1997, ケアを問いなおす—〈真相の時間〉と高齢化社会, 筑摩書房.
- Hochschild,A.R., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 石川准・室伏亜希訳, 2000, 管理される心—感情が商品になるとき, 世界思想社.
- 堀江剛・中岡成文, 2005, 臨床哲学とケア, 川本隆史編, ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ, 第6章, 有斐閣.
- 池川清子, 1991, 看護—生きられる世界の実践知 (フロネーシス), ゆみる出版.
- 今村光章, 2005, エーリッヒ・フロムの思想と持続可能性に向けての教育 —「ある存在様式」と社会変革論の視座—, 今村光章, 持続可能性に向けての環境教育, 第5章, 昭和堂.
- 伊藤博美, 2006, ケアリングのはたらき —無給労働か専門職か—, 中野啓明・伊藤博美・立山善康編著, ケアリングの現在 —倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて—, 第14章, 晃洋書房.
- 角野善宏, 2010, 心理療法における「臨床の知」—風景構成法と夢分析による—, 矢野智司・桑原知子編, 臨床の知 —臨床心理学と教育人間学からの問い—, 第2章, 創元社.
- 川本隆史, 2005, 《ケアの社会倫理学》への招待-ケアと社会のインターフェイスを点検する, 川本隆史編, ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ, 有斐閣.
- 牧剛史, 2014, 臨床心理士養成プログラムにおける実践知の重要性, 佛教大学教育学部論集 第25号.
- Mayeroff,M., 1971, *ON CARING*, Harper&Row, Publishers, Inc. New York, 田村真・向野宣之訳, 2005, ケアの本質—生きることの意味, ゆみる出版.
- 三井さよ, 2004, ケアの社会学-臨床現場との対話, 勁草書房.
- 文部科学省中央教育審議会 (2014. 6.25) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (案) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325922.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325922.htm).
- 守屋治代・吉田敦彦, 2009, 今, なぜ「ケア」なのか, 日本ホリスティック協会・吉田敦彦・守屋治代・平野慶次編, ホリスティック・ケア —新たなつながりの中の看護・福祉・教育—, せせらぎ出版.
- 中川吉晴, 2005, ホリスティック臨床教育学—教育・心理療法・スピリチュアリティ, せせらぎ出版.
- 中野啓明・伊藤博美・立山善康編著, 2006, ケアリングの現在—倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて, 晃洋書房.
- 日本看護協会, ケアリングの倫理, <http://www.nurse.or.jp/rinri/basis/caring/>
- Noddings,N., 1984, *Caring*, University of California Press, 立山善康他訳, 1997, ケアリング, 晃洋書房.
- Nonaka,I.&Takeuchi,H., 1995, *The Knowledge Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation*, Oxford University Press, Inc. 梅本勝博訳, 1996, 知識創造企業, 東洋経済新報社.
- 野中郁次郎, 2013, イノベーションは「生き方」の実践論である—哲学の新潮流を知識創造理論に包括する試み—, 一橋ビジネスレビュー, 61巻1号, 東洋経済新報社.
- 荻森直子, 2010, エーリッヒ・フロムにおけるアクティビティの概念 —市民性教育への示唆—, 東京大学大学院教育学研究科紀要 第50巻, pp.201-209.
- 大山泰宏, 2010, 心理療法の「枠」と臨床の知, 矢野智司・桑原知子編, 臨床の知 —臨床心理学と教育人間学からの問い—, 第3章, 創元社.
- Roach,M.S., 1992, *THE HUMAN ACT OF CARING*, Canadian Hospital Association Press, Ottawa, 鈴木智之・操華子・森岡崇訳, 1996, アクト・オブ・ケアリング—ケアする存在としての人間, ゆみる出版.
- Schon,D.A., 1983, *The Reflective Practitioner: How*



- professionals think in action*. New York: Basic Books, 佐藤学・秋田喜代美訳, 2001, 専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える, ゆみる出版.
- 関根宏朗, 2009, エーリッヒ・フロム「自己実現」論の再構成 —「持つこと」と「在ること」の連関に注目して—, 教育学研究 第76巻 第3号, pp.26-38.
- 新堀通也, 2001, 臨床教育学の概念—わが国における展開と系譜, 武庫川女子大学教育研究所研究レポート第25号.
- 住野好久・中山芳一, 2010, 教育実践における発達支援・権利保障・ケアリングの三位一体性に関する研究, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第10巻, pp.21-30.
- 鈴木路子, 1999, 学校における健康教育 第3部第1章「はじめに」, 鈴木路子・眞野喜洋編著, 教育健康学, ぎょうせい.
- 鈴木路子, 2014, 人間のよりよい成長を育む「公衆衛生看護学(地域看護学)」の再構築, 鈴木路子・東京福祉大学大学院教育学研究科編著, 教育の基礎としての公衆衛生看護ノート, 第1部, 教育課程新聞社.
- 高橋勝, 2004, 創刊にあたって, 臨床教育人間学会編, 他者に臨む知, 世織書房.
- 武井麻子, 2001, 感情と看護 —一人との関わりを職業とすること—, 医学書院.
- 武井麻子, 2005, 感情労働としてのケア, 川本隆史編, ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ, 第5章, 有斐閣.
- 田中智志, 2004, 序にかえて, 臨床教育人間学会編, 他者に臨む知, 世織書房.
- 田中智志, 2012, 教育臨床学という試み, 教育臨床学〈生きる〉を学ぶ, 高稜社書店.
- 田中每実, 1980, エーリッヒ・フロム「自己実現」論の成立と構成, 教育哲学研究Vol. No.42, pp.1-7.
- 鷺田清一, 1999, 「聴く」ことの力—臨床哲学試論, TBSブリタニカ.
- 矢野智司, 2010, 臨床の知が生まれるとき, 矢野智司・桑原知子編, 臨床の知—臨床心理学と教育人間学からの問い, 創元社, 序章.
- 矢野智司, 2013, ケアの倫理と純粹贈与 —ケアのアマチュアリズムを讀えて—, 西平直, ケアと人間—心理・教育・宗教—, 第2章ミネルヴァ書房.
- 吉原恵子, 2011, 感情社会学とケアリング —感情労働とケアについて考える—, 吉原恵子・広岡義之編著, ケアリング研究へのいざない —理論と実践—, 第6章, 風間書房.